

新撰字鏡の反切

— 卷第一の検討よう —

一

私は以前に、「新撰字鏡の直音注について」考察し（本誌59輯、以下前稿と呼ぶ）、それと和的な要素の見えろことを指摘した。そして、その目で見るならば、本書の反切にも疑いを抱きはささなければならぬ。くには果して、云われる如く、「和風の反切」が潜んでいるのか否か、若しそうとすれば、それはどの範囲にあるのかを明らかにする必要がある。それと答えるには、畢竟、「本書全体の字音の検討」以外にはないのであるとして、それを前稿では、今後の課題に残したのである。

その後、新撰字鏡の反切を少しづつ調べようとしているが、この大部の本書は、そう一朝一夕には片付くはずがない。そこで、まず手始めに、全十二巻の中の一巻を検してみ、何らかの手掛りを得ようと力めたかと思う。

高松政雄

本稿は前稿を承けた、そういう試みの一部である。

斯かる本書の反切の研究は、本書自体の本質究明に必須であるばかりではなく、また、我が国漢字音史の一環としても大きな意義を有することは言うまでもないことである。更に、これが明らかにすれば、他面、本家の中
 国語音史にも資することが出来るのである。が、私としては、特に、*Sino-Japanese* に関する諸問題の解決を意図しての研究の、これは一端なのである。①

二

新撰字鏡はその序文に依れば、まず、玄奘音義と「他文書」とを備別にし、後に、玉篇、切韻、並びに「私記」を「据加」して成つたものであることは明らかである。そして、それらが如何に配置されているかは、貞州伊徳氏に依って、大略「解剖」されている。右の幾つかの出

典の中、切韻、玉篇、玄宓に關しては、その音体系は今
日既に整理済みである。それ故、問題は當然、右三書以
外のところらに集中するものとせらる。本稿では、その出
典を大別して、A切韻、B玉篇、C玄宓、D上記以外、
とするが、このCとDとは「混雜」していて、その弁別
は難しいことが多い。

加之、嚴密には、これは原本がやうであつたのか、或
いは本書の増補中に斯くなつたのかは未詳のことと屬す
るが、右のA・Bの中にも、他の要素が混入しているこ
とがあり、また、Dの中にも、A乃至Bたることの確定な
ものも紛れ込んでいるのである。とすると、本書の一字
一字、綿密な照合と考証を要する訳であるが、こゝでは、
それを展開するのではない。本稿は、我が國の漢字音考
察に狙いがあること、前述の如くであるからである。因
つて、常道に従つて、まず広韻を基準として、一字一
の音形を検し、それと齟齬するものを更めて見直すとい
う方法をとる。この際、第一段階では、私に云う「中古
正音」の規定を応用して、非広韻的音形でも、それが、
玉篇的正音、玄宓的正音であれば、許容してしまふ。と
すると、結局は、右のA、B、C、の箇所のものには殆

んど問題がなくなつて、Dのみが残るのである。このD
の中での非広韻的音形が焦点となる。

Dの箇所ものは、本書序文にある「他文書」「私記
」の引用であるが、今、分るうは唯それだけ選ぶ
ず、具体的に「如何なる書ども」なつか、「いとむい
とも心得ぬ」(玉勝間)のである。

抑く、「私記」なるものは、本書編纂當時に、既に存
したことは明らかなであるし、それ以後も我が國ではかな
うのものが作られたようである。例えは、奈良朝現在一
切經疏目錄(石田茂作編)、勅撰法相宗章疏目錄、東域
伝灯目錄、諸宗經疏目錄等々に依れば、それは確認され
るからである。しかし、それらは全て現存する訳でもな
いので、本書との照合には限界がある。因つて、出典は
遂に明かす得ないことにならう。けれども、その音系統
或いは音形は推定がまきくはすである。

右の私記等の系統を引く音形には、白藤礼幸氏の一連
の調査があつて、次第に明らかになつてつある。が、そ
れ以外にも、出典未詳の音は幾多あるはずであり、やう
いう中であつて、大きな纏うを有するもの一つとして、
この新撰字鏡が存在するのである。これは斯くて放つて

は置けない。

諸書における出典未詳の音形一反切は、お互いに一致するともあるし、一致しないともまた多々あるのである。

新撰字鏡の場合でも、くくのDと、例えば、自藤氏の上代仏典注釈書、信行大般若經音義、新訳華嚴經音義私記中の未詳のものと比較すると、余り合致しないのである。因みに云えば、右の中では、信行と合うことが一番多い。くの信行大般若經音義は、或いは、玄奘大般若經音義の「私記」かも知れない一書である（築島裕一「大般若經音義諸本小考」）。

斯くすると、それら他に容易に例を見出し難い音一反切音は、何れ由来するものであろうかという問題に注意せざるを得なくなる。くくで、「和風の反切」がクローズアップされる。つまり、それらが所拠を有するものか否か、所拠を有する場合でも、それが「私記」であれば、「和」の可能性はないかと攻めて行くからである。従来は、割と単純にそれを和製で処理する傾向が強かったかと思えるが、繰って、くくで、往時う我が国人にとつて反切とは如何なるものであつたかと思いを致す時、果してその簡単にゆくものかどうか、疑念が涌出するのである。

る。

新撰字鏡序文の中、次の如き箇所がある。即ち、「於字之中」

或有 東倭音訓 是諸書私記之字也
或有 西漢音訓 是数疏字書之字也

この封句に依れば、「私記」は我が国製のものらしい。他にくれ類した表現をみると、くもあつたので、本書では、どうやらその心算の如く見える。但し、一般に、「私記」は我が国のものであるとは断言出来ないようにである。くの矣、甚だん許ないではあつたけれども、例えは、日本国見在書目録を稽くと、外典の彼土製の私記が登載されている。とすると、「私記」は必ずしも、その製が彼我弁別の徴証とはなす得なくなつてやうなものである。管見の限りでは、彼土では例が少くないときでは云える。右のことは更に判然としなければならぬ事柄ではあるが、当面の問題は、仮令、それが明確であるにしても、「私記」における反切は、必ず和製であるとは云えない矣である。換言すれば、「私記」の和製と、反切の和製とは常には結び付かないといふことである。斯かる親矣よりすれば、事は自然、我が国人と反切との關係究明に

何かわづらを得なくならう。既に明らうであるところの、
法華經單字等の和風の反切以前に於いて、我が國人が何
時、どの程度、反切を創出したかの問題も含めて、こゝ
に、前述の如き、大難問が出来する訳である。

このためにも、本書Dの箇所は探求するに価する。本
稿では、これだけで直ちに結論を導き出すことは出来な
いだろうし、また、出すべき算もない。事実を忠実に眺め
て、解答を出す準備をしなく思ふ。

三

さて、非広韻的音形は、一字の声母、韻母、声調の三
要素より分析するのが普通であるが、こゝでは、その中の
韻母を中心に於いて考察する。とすると、当然、異韻にな
るものが対象となる。その中でも、特に、十六韻根で異
根に相亘るものから手掛けることにする。それは、これ
が大勢的には最も特徴的であり、幾つもの親矢から極め
て注目すべきものであるからである。

新撰字鏡卷第一は、約一千四百字という異う字数から
成り立つ。これは、反切を有せる字数で、異体字は正字
に含まれてゐる。また、同一字の重出も、一字で纏め

ている^②。そういう中で、二十字程が当面の問題形なので
ある。本書をどうの儘に認めるならば、なほこの数は増
すけれども、他面、本書は割に誤字も多いものである故
に、明らかになれと指摘し得るものは始めから私に校合
して、問題とはしないで置く。斯かる私見を加えれば、
の異根間相通を、以下に取ら出してみる。以下の中には、
まだ救えるものが若干含まれてゐるが、ともかく、先に
その検討を経た上で、最終的に残るものに関して、後で、
本稿での結論を示せうと思ふ。

以下、具体例の記述法は次の如くである。

母字一(広韻音形)―新撰字鏡反切

- ① 烘(曉・開一) 虎公・虎公二反(蒸・謹)
- ② 佟(定・合一) 徒登反 平(登)
- ③ 燈(敷・鍾合) 蒲公反(蒸)

右の新撰字鏡の反切で、傍線部の韻母は、広韻ではそ
の下の括弧内の韻母となつて、異根のものとなつて
ある。この三例は、通根―曾根の関係に立つ。
他に、手許の資料で、これらの反切を調べてみると、
これは、Dのものである故、無論、玄交音は不明だが、

斯く、曾獲に於けるものは見出されぬ。唯、同獲内では小異を認め得る。それを例せば、經典釈文中の不雅音義では、

① 烘 火公反(沈旋・顧野王)

巨凶反(郭璞)

音恭 (孫炎)

巨凶・甘凶二反(字林)

とある。広韻における東韻が、くくでは、鐘韻ともなる。また、今は直接の対象とはしないけれども、声母の面でも、古は、見母、群母の音をも示していることと留意しておきたい。

同様にして、龍籠手鑑では、

① 烘 呼東反 又音 紅(匣母)

② 佟 徒紅反(東)

なる音形を示す。また、集韻には、

③ 燈 蒲蒙切(東) 敷容切

とも見える。我が名義抄(親智院本)でも、

① 烘 音洪(匣母)

② 燈 薄功反 蒲功反(東)

と承けているのである。

くくに例示した形は、切韻系韻書には絶えて顔出ししない(十韻彙編及び王三)。

斯く、同獲内における相通は拾い出せる。が、新撰字鏡の如きは、この三字に限っては、管見に未だ入らないのである。

これは、以下のものも同様であるが、各単字の個別的な読音の差の問題である。しかし、その所拠が、先程の不雅音義の如く明白ではない本書の場合は、これはこれで以て一往認めておく外はない。そして、それと体系的な解説を加えてみることにし、処理の方法は残されていなくてあろう。一般に、個別的変異は、体系的な解説の域外にあることも稀には存するけれども、大抵は、何とか説明がつくものであるはずである。くくでも、その原理で一先ず推してみようと思う。

さて、同獲と曾獲とは、上古中国語に於ては、一部分が重なる程に、極めて接近していた。そして、その名残が、中古に入ってもなお松栞出来なかつたものである。この点に關して、王力の言(南北朝詩人用韻考)を引けば、次の如くである。

依謝惠連雪賦看來、蒸可平東通用、同時、与「竹」

(屋)「曲」(燿)急韻、由此看来、烈登と刺鐘相

近

右の謝惠連は、王力規定に依る南北朝第一期の人である。その頃では、通・曾撰の相通は行われていたのである。それのみではない。唐代においても、この両撰、特にその入声は近しく扱われていたようである。その証拠は、例えば、杜甫では、近体詩よりも自由で、その意味では、より現実の語音に即していた古体詩で、これらは押韻されているのである(向島成美・杜甫詩の用韻について―東京教育大國文学漢文学論叢19)。

詩の押韻例のサでは、大雑把に選ぶる嫌いがあられるけれども、なおこのことは、經典釈文においても確かなことなのである。例えば、それを尔雅音義で見れば、

戎(日東開了) 本戎作戎 如勇反(顧野王)

如升反(沈旋、蒸)

慶(明東開了) 亡工・亡棟ニ反

亡増反(沈旋・施乾、登)

の如くである。また、別に、

豊(敷東開了) 敷馮反

なる例もある。この反切下字は、広韻で、

馮

(奉東開了) 房戎切
(奉蒸開了) 扶冰切

となる両説字である。従って、尔雅音義の「敷馮反」は、これだけでは、東韻・蒸韻、何れとも決し難い例となる。広韻でも、両説字が残り、釈文で斯く判然とした例が見られる以上は、最早、通・曾撰の相通は、中国本土でも動かし難い事実としなければならぬ。特に、南北朝期―中古中国語の初期では、決して稀な現象とは云い難い状況にありたと解される。

この視野の下に、先の新撰字鏡の三例を置いてみると、これは、彼土でもあり得る形だと認められよう。とすると、本書所拠の或「私記」には、現存文献よりは古い中国音形を記載したものがあつたものと考えられるのである。纏って、我が中古音では、この相通は極く当り前ではある。と云って、そこから直らぬ、これを和製とは致し兼ねる。そのために、前述の如き、中国語音の動きを見ないのである。

- ④化(曉禡合工) 胡卦反 去(卦)
- ⑤暇(匣禡開工) 胡評・許解ニ反(卦)
- ⑥膈(見佳合工) 花細反(戈)

右は、蟹撮と仮撮の相通例である。しかし、これは、中古中国音において、屢々行われるところの、周知の現象である。慧琳も既に指摘しているし、その後の諸事情はあちこちで触れられている。私も少く述べたことがある（吳音一岐阜大研究報告人文科学2）ので、最早詳述する必要はない。唯、右の拙稿では引かなかった二の説明をくくって挙げて、以て、この相通理解に代えておこうと思う。

一つは、杜甫・近体詩（前述）における押韻例である。かくて異撮字に依る押韻はこれしかないと報告されている。

今一つは、「五経文字」にあつても、同様に、異撮間に相亘るのは、蟹撮二等と仮撮二等のみという邱榮芬の論である（中国語文1914年3期）。その要旨を次に引く。

各撮之間的關係

撮和撮之間、除了上面已經討論過的佳・麻兩韻以外、幾乎沒有什麼混切。

当八世紀的時候、一個方言音系撮和撮之間界限大致保持不亂。

このことは、また広韻でも、兩読字が残っていることで、より確実に推し得られる。例之は、

蛙 烏婿切（影佳合2）

戸婿切（匣佳合2）

烏瓜切（影麻合2）

の如くである。また、広韻では、佳韻に収まっているものでも、他書では、麻韻であつたり、なお兩読であつたりする例があるのである。それを一つ示すと、

歇（見佳合2） 古蛙切（玉三では姑味反）

は、原本玉篇、篆隸万象名義で、

歇 古鞞反（麻）

となつている（新撰字鏡では、この字は凡て、当然、右の玉篇の反切通りである）。それが、龍龕手鑑では、

歇 古蛙・古花二反

と二音を記す。

斯くて、新撰字鏡に戻れば、この韻相通は納得がいくが、更に念のため、これと類似の相通を、「五経文字」から出してみると、より判然とするであらう。即ち、

匕（曉樹合2） 火卦反（広韻一呼覇切）

挂（見卦合2） 古化反（一古亮切）

である。

ところで、新撰字鏡の例は、一往、首肯出来やうではあるが、しかし、くの儘の形では疑問が残るのである。

どうか誤字の恐れがあらうやうに思える。それを一つ一つ取り上げていくと、まず、④では、その反切上字「胡」が引掛る。「胡」は匣母である。声母に關しては、前

に①②で見え如きすが、個別的にはよくあるので、軽々に云為出来まい矣がある。従つて、或いは斯かる疑いは不要であるかも知れないのだが、本書の例からすると、全幅の信頼は置き難いのである。

本書巻一では、曉母の中で、その反切用字が合致しないものが八例ある。それらは三つに括り得て、

(イ) 反切上字が「ロ」(漢母)のもの 2例

(ロ) 反切上字が「字」(匣母)のもの 3例

(ハ) 反切上字が「胡」(匣母)のもの 3例

となる。この中、(イ)は疑問であるが、(ロ)は「呼」(曉母)かも知れない。この「呼」のロ備は、古くは、小さく隣の左上に添えられるが、如き感じて書かれるからである。やうでなくとも「字」は「呼」に通じて、玄韻では曉母にならなけれども、他では、これ自身で曉母でもある

ので、まず、この(ロ)は異例からは消し得るのであらう。

(ハ)の三例は、一つは今問題のもうであるが、他の一つは、それと同じような条件下にある。それは、

儼 胡縁反

である。残りの一つは、

霍 胡郭反

だが、これは玉篇に出る反切であり、また、尔雅音義では、

霍 呼郭反、許郭反、刈各反

と、曉母でも匣母でも記されるものとなっている。

とすると、(ハ)では二例が疑われる訳である。しかし、

新撰字鏡では、例えは、卷二に、曉母—匣母相通のことがあつて、この二例も、或いは「許」(曉母)かと考へなくともよいのかも知れない。特に、(イ)の例は、卷二にも出て、どうやら、本書Dの特徴らしく見える。そんな訳で、④は一先ず訂正すべく置く。それと、後のものであつた「韻補」は、

化 叶胡隈切 音回(匣母)

とも見えるのである。

なお、この④は、玄広音義でも、「消化」の条下に

るけれども、「呼菰・呼霸二反」なる反切、並びに、これ以下の註記が、本書とかなう離れるので、どうも、これとはし難いのである。因つて、Dとやらざるを得ない。

次に、⑤は、第一着目の反切がおかしい。右に「マ」として反切下字「評」は、多分「評」であらう。とすれば、その「胡評反」は、「王一・王二・王三」の形である。本来、一音しかなくとも、二つ（時には二つ以上）の反切を記すのは、他書にも例がある。つまり、そのことは、編者が複数の書より抜き書きしていることと証明となるものである。他書の例はさて置いて、本書からこれを示すとすれば、これは比較的容易である。参考のため、一つだけ出しておこう。傍線が右側へ、出典を記す。

(玉篇)(切韻)
日：如逸・人質二反 入 (玄韻) 説文を引く
(尔雅)
実也 太陽輝也 常滿不

新也 所出為太平 所入為大蒙

新しく知す具合である。他書ならば、この出典名を出して、「日」とするところを、本書では全て省くのである。従つて、反切用字は異つても、実質的な音は変りはない訳である。この⑤も、そのように解される。

「呼菰」これも、④と同様に、玄音義にはある字である。しかし、やはり、反切も註記も、殆んど別物の如くである。玄音では、

八音暇：遐嫁反 (註記略す)

である。最後の⑥は最も問題である。先づ、反切下字から云うと、この場合は、戈韻となっている。これは普通ではない。一般に、佳韻と通ずるのは麻韻である。その矢で、これは或いは「加」ではないか。そうすれば、後は、この上字だけの問題となるのである。

その上字は、曉母である。「花」を「華」に戻しても、それは匣母の曉母であつて、この母字の見母とは合わない。

「花」は反切上字には、滅多に使われない字の如くである。玉篇にも、玄音にも見えない。慧苑や慧琳でも同様である。尔雅音義にもない。他方、我が法華經華字でも用いられていない。玄韻でも、唯一回きくものである。即ち、それは、

拈(曉聲合之) 范夥切

という一小韻一字の場合のみである。しかも、これは切

韻には行いのである。そういうものが、新撰字鏡巻一では、「華」の方で今一つ見える。

佳（見佳開二） 華崖反 平 倭火伊反

この母字の反切は、広韻で古膜切、玉篇（篆隸万象石義に依る）・玄扈で古崖反である。反切下字からすれば、これは玉篇・玄扈に近付きやうであるが、上字の「古」は「華」は一寸、類似という訳にはいくまい。それに、この倭音「火伊」という合口音も問題である。

新撰字鏡巻一の見母に於いて、非広韻的声母は十例ある。その中、斯く曉母に通ずるものは三例に過ぎぬ。二例は右に見たとくちであるが、あと一つは、

倭（見御開了） 欣房反 去

と出る。これは、前二者とはかなり様相が違ふ。

中古中国語音では、牙・喉音の混することはない。但し、個別的には、個々の単字の読音では、存在する。それ故、今の④の場合、若しこの反切下字を「加」に訂正すれば、「花」を反切上字とする稀な例ではあるが、

彼土流に成り立ち得るものとしなければならぬ。

字鏡、訂正すれば、戈韻の儘でも、これは曉母とは中古

中国音で結び付く。曉母麻韻の方は云うまでもない。

斯くて、誤字の可能性という点から眺めては似たものの、やはり残るものは残つたのである。が、少なくとも、韻母の上では、結局、佳韻と麻韻との相通として収まり、これまた、我が国製の明白なる証拠とは云えやうで終るつてある③

さて、次に、宕・梗攝の相通がある。

⑦ 倭（群映開了） 渠向反 去（漾）

⑧ 箭（喻藥開了） 羊石反 入（音）

⑨ 伯（幫陌開了） 蒲各反（鐸）

宕・梗攝も、上古中国音では一部を共有していたものが、中古において分化したものである。従つて、その近似性は容易に推定される。そのことは、特に⑦の如き場合、諧声系列でも明らかである。即ち、「京」単独は度韻（梗攝）でありながら、それと備が加わると、陽韻（宕攝）になるものが多い。この⑦「倭」は度韻であるけれども、例えば、「涼・涼」等は陽韻に属する。また、この「倭」も、集韻、洪武正韻等の一音に依ると、来母陽韻の場合がある。斯くの如くである。

康熙字典に依れば、開元五経文字に、

倭 詭疆 去声 其亮切

と、陽韻の反切が認められもする。我が名義抄にもそれがあつた。

涼 渠命反 巨亮反

この上の反切は玉篇のものである。下のは、未だ出所を知らないけれども、正しく陽韻である。(4)

この①は註文よりすれば、玉篇から引いたとも取れるようである。とすれば、この反切下字「何」と「命」とは字形的にも近付くかも知れない。本書にはこの逆の場合もある。即ち、陽韻の「涼」が、「借音 力將・力命 二反」、また、「諒」が「力何反 力命反 去」とされる。因つて、強ちに、字形上の疑いは、今の場合、抽しはさまなくともよかろう。音形としては、十分成り立つものであつたのである。

ここで、類例を一つ、尔雅音義から出して置く。

振 (知陽開) 音張 また、丈亮反 (字林)

②に關しても、この通の反切は未だ他に知らないものであるが、例えは、①は、②と同じく、その諧声系列から、陌・鐸韻兩者分ち難い關係にあることが窺える。つまり、「自」自身は陌韻であつても、これに偏が付くと、鐸韻ともなる。そのことはまた、この反切下字「各

」に於いても変らないのである。「各」自身は、今度は逆は鐸韻であるが、これを音符とするものは陌韻と行るものがある。「格」は意味の相違を有するけれども、音としては、陌韻と鐸韻とに跨る。が、広韻では、反切下字となる時は陌韻(二等)に一定する。

斯の如きことを含んで、微妙な、融合的な例を、また尔雅音義で見つけて置く。

磔 (知陌開) 張洽反 (鐸) 広韻(勝格切)

以上のように見てくると、右三者の反切も、何か彼土の所拠に思ひを致さざるを得なくなるのである。但し、

①はこの儘では並母である。幫母ならば、草冠のない「補」であつてほしいところ。新撰字鏡では、「蒲」を「蒲」とする癖があり、この①も実はその異体字の方であるのだが、果して不用意に草冠が付いてしまったものならぬであろう。康熙字典では、「伯」又叶蒲各切 音博」ともしてゐるが、つまりはこの協韻説に落着くのである(この音「博」には一寸私は自信がない。これは幫母の字であるから)。

右に關連するものとして、宕梗と江梗同用の例が一つある。それは、

⑩ 焔 (精葉開々) 子葉・子削二反 (寃)

である。この母字はまた、精葉開々 の音も有するが、今は直接関係しないので、触れない。

宥擾と江擾の相通も、やはり彼土に例がある。その南北朝における事例は、王カに詳しい。江擾江韻は上古中国語で、東部は属していたため、中古的に云えば、これは通擾相当のものである。それが、次第に、通擾とは龍れて、寧ろ、宥擾に近付くが、中国語音史上のこの韻の特色となっている。今の場合の相通は、その上古より中古中国語への過渡期の所産である。尔雅音義に依れば、次の如き例もある。

葉 (来鐸開一) 郭璞音洛 又カ削反

⑩の二反切は、葉韻と覺韻とを示して、この後者が問題となるのであるが、葉韻には、「側角切」の音も出している。但し、この場合の声母は、齒上音の莊母である。龍籠手鑑では、この集韻と同音の「音提」なる「直音注」が見える。そして、我が名義抄に於いても、これを引く程ぐりである(又 側角反)。とすれば、⑩には、玉篇・切韻の葉韻の音以外に、今一音、覺韻も存しなくては明白となる。

因みに、この際の声母は、精母であったとしても莊母であったとしても、さして支障とはならない。それは、斯かる類隔切は古く遡る程、珍らしくはないものだからである。現に、広韻でさえも、その若干の痕跡を留めている位である。また、この⑩の註記は、集韻に最も近い。さて、この次に、臻・山擾に亘る場合を取り挙げればならぬ。それは、

⑪ 燔 (奉元合了) 蒲奥・補干二反 (痕・寒)

⑫ 味 (明隊合一) 正莫術反 去 (咍)

(明末合一) 借問剛反 入 (沒)

である。

⑪はまた別に、Bの箇所下、「燔 音審」とも出る。「燔」は「燔」と同字である。玉篇は実は、「扶藩反 扶園反」という反切を有するものであるが、新撰字鏡では「直音注」に置換されている。この「直音注」は全く広韻的同音である。が、それはそれとして、⑩の反切に度々、この母字は、玄衣音義にある。そして、その反切は、扶衰反 扶元反

と二通りになる。何れも広韻音に一致する。⑩の註記は類似の意味が書かれてはいるものの、玄衣の儘ではな

い。従つて、反切の大いに掛け離れるところよりして、これは、Dと考へざるを得ないものである。

ところで、⑩の二反切は、共に非広韻的である。その反切下字を広韻音に直すと、前述の如く、痕・寒韻になるが、広韻では、この両韻は唇音と結合しないからである。広韻では唇音は、魂・桓韻となる。が、「王三」では、痕・魂韻の方は明らかに分立しているけれども、寒・桓韻の方は未だ合併の状態にある。更に朔と、呂静、夏侯詠、陽休之等の六朝音韻家では、魂韻は痕韻と融合している。因つて、その辺りまで行けば、最早、これらと唇音との結合は問題外になつてしまはずである。右の非広韻的的反切上字・下字の結び付きは、一往、このように考へて、理解していかうと思ふ。

⑩の母字、山攝元韻は、韻書では、例えばやけり六朝音韻家の夏侯詠、陽休之、杜台卿では、魂韻と同用である。一方、詩人の用韻では、南北朝において、元・魂・痕・寒韻は通押する(王力)。序では、⑫の入声の方も先に云つておけば、末・没韻、屑・月韻は同用のことがある。これは当然である。下つて、唐代でも、杜甫の古体詩では、この現象が顕著である。そして、その因は、

元韻が兩攝を結ぶ役割を果たしている(何島成美)とくわにある。このことの詳細は、私も以前に述べたことがある。蛇足ながら、ここで、その結論のみを再録すれば、次の如くである。即ち、

元韻は山・臻攝の $ma\ en\ me$ と性が合つたのである。或いは逆に、右の三形が皆、この韻に寄つて来たとしても云うべきものなうであつた(王朝6)。

*この兩攝はなほ細かく分れた音形を有する。それを me と me とは、大きくこの三形で代表している。畢竟、この⑩でも、元韻が痕・寒韻・臻・山攝を繋いでいて、決して、例外的存在ではないことが分るのである。

新撰字鏡では他(卷二)に、
踰(影沈合) 胡蘭反 上(寒)
なる例もある(但し、この反切上字は問題とする必要があるけれども)。また、参考として云えば、別は元韻は先・仙韻とも通じている。
燎(疑沈合) 五玄反(先)
憲(時願開) 欣董反 去(寒)

元韻の古い時代の実情は、如上である。が、唐代に入ると、これは次第に、先、仙韻に近付いて行き、慧琳では全くそれと合流してしまふ。そして、この秦音を承けて、近代中国音は形成されるのである。その一方では、例えば、杜甫詩におけるが如きことも、介在した。そういう中で、この唇音は軽唇音化する。因つて、他の牙喉音（元韻には舌齒音はない）とは音相を異にするに至る。それは、我が所謂漢音の仮名書音形にも反映する。つまり、牙喉音は「ピン」となつても、唇音は「フ」なることは少なく、「ムン」となるのが寧ろ普通なうたといふものである。

そういう目で①を見ておかなければならない。その反切上字も、これは重唇音のものである（並母と幫母、但し、第二のものには、或いは草冠を落しているのかも知れない）。唯、それは云つても、このだけの特徴ではくれない。新撰字鏡のDでは、一般的に云つて、重唇・軽唇の区別はない。また、「五音」の中その他でも、例えは、舌音は舌頭音と舌上音とに分れてはいない。その事情は齒音でも同様である。つまり、非広韻的なのであつて、全体的には本書Dは、中古中国語の早い時期の古い

姿を呈していることは疑をいってゐる。

②は、この箇所直前に、

昧 莫割反 望也 曰見日中也

と見えろもくと混同されやうな字である。この方は、反切も註文も、切韻に遵う。従つて、Dの箇所は或うな、多分、Aなりであらうという例となる。即ち、「切

三」 「王一」 「王三」

昧 莫割反 望 易曰日中見昧

とあるのである（註文は広韻も同じ）。この反切下字は、唇韻であるが、前述の如く、「王三」までは、陽類の寒、桓韻と相配されるもの故に、末韻と分離していなくて、いのである。やうすると、新撰字鏡の註文の方は誤字があることにならう。事実、右の儘では、不十分である。少なくとも「易曰」でなければならぬ。幾ら本書では出典を書かぬと云つても、斯かる註文中の出典を削るはずはなからう。Aの箇所では、原本は何の出所を明記してある場合は、やはり本書でも省略しない例は散見する。右に続く④の「正・借」二音の中、正音の方は、同標字である。唯、本文では「去声」とするけれども、この反切下字「猜」は平声に属する。が、本書では、斯くの

如きずれば、外にもある。若し、誤字でないとするれば、これは、四声の移動を示すものにならう。また、母字の仄韻と反切の始韻とは、同じ一等でありながらも、開合は異なるのである。しかし、唇音下にあるのは、仄韻でも、その開合を混同することがあるので、その矢のうは許容して置くうと思う。この類例は、本書に若干ある。それのみは、玄念音義にも見える。

昧 莫对反 莫配反 莫蓋反

その玄念では、丁度、この④の字があり、それには、の三通りの反切が記されている。この中、三番目ののは、泰韻ではあるが、開口呼なのである。なお、玄念にはこの字の入声の場合がなく、また註文も新撰字鏡とは合わない。因って、②はやはり、Dにならざるを得ない訳である。

として、②の前者は、一往、片が付く、問題は後者である。しかし、この末韻—没韻相通のことは、前述した如くである。つまり、一般形としては、あり得ることは動かない。否、それのみではない。協韻説ではあるが、文選音決（公孫羅）には、この字に就いて、

昧 音没 五家未

とある。この理解のため、それが見える鮑明遠の「代君子有所思」（五言詩、卷引）の押韻字を引いてみると、次の如くである。（括弧内は韻名）

關（見） 髮（見） 月（見） 勃（没） 越（見）
発（見） 歇（見） 骨（没） 没（没） 昧（没）

右でも、山撰月韻（平声は元韻）を中べりして、臻撰没韻（平声は塊韻）が通押している。それら今問題の②が加わるのである。そして、これが、人に依って、二音に解されるのであった。

斯くて、この後者も一まず収まりがつく。なお、この反切上字「明」は明徹母を示すための用法としては、珍しいものである。即ち、仄韻にも、玉篇にも、玄念にも見えない。慧琳では、

歿（明没合） 門骨反

等と稀にある。この反切は、母字にテ意を、用字としては、④の借音の方と同一である。新撰字鏡巻一には、反切上字の「明」は、④を含めて二例ある。そのもう一つは、

晦、明没合） 門回反 平

であって、D所屬のものである。斯かる稀少価値を有す

る反切例は、先の④における「花」と共通する。

とくろで、最後の一例、

⑩ 修（バ尤開4） 脣流・七例ニ反（通）

の場合がある。この二つの反切では、下のものが、虞韻
になっている。その声母も、これは清母であり、また、
韻母も去声ではあるが、この矣は一旦措く。すすれば、

右は流接と遇接の相通という問題になる。

この両韻は極めて音形が近似し、端的には、その韻尾
の長短の差しかないとまでいえる。従って、
特に我が中古吳音ではこれらは融合的であるが、しかし、
一方、彼土でもその例は散見する。例えは、本書巻一の

Bにも

燭（来宵開3） カ須反（虞）

と出る。經典釈文でも幾つか存している。それらは既に
指摘済みととてある（坂井健一）。

康熙字典では、⑪の母字に就いて、

修 叶詢趨切 音須（バ虞合4）

としている。私としてはこれをくろく結論として利用し
ておきたい。

しかしながら、先程一旦目を瞑つたとくろく、くろく

七」という声母には、未だ確信が持てない。この「七」
は本書巻一内で、清母以外の箇所は、まだ五回登場する。
そして、それが、「全清」「全濁」両声母の場合を、代用
するからである。因みに付言する。⑬と同音の字で、後
にはよく同一視される「脣」の反切は、本書Dで、次の
如く記される。

脣 脣流・珠流ニ反

この第一番目のものは、玉篇に遡うが、二番目の上字
は、照母なりである。唯、この方はこれ一例のみの例外
であり、しかも、「全清」同士であるので、前者⑬より
は考え易くはある。

四

以上十三例は種々の穿鑿を経ると、中国語音史上の
上古から中古への過渡期的音形として、一往理解はされ
るものばかりであった。少なくとも韻母の面では、まず
中古中国音の最初期的なものに相通うことは確かである。

とくろで、次に、右程には判然としないもの、並びに
誤字の疑いあるもの等について、なお考察を続けたい

くとしする。

⑭ 曜 (喻笑開4) 亦作耀 弋羊反 去 (陽)

この反切上字は実は「弋」の字となつてゐるが、これは誤りであらう。他にも、弋↓弋 とする例がある。因つて、先に訂して置いて宜しからう。さて、問題は傍線部の「羊」である。母字は宵韻の去声で陰類。それを陽韻で、しかも四声を「去声」としなば、平声字を持つてゐる。陽韻は云うまでもなく陽類である。この陰・陽類対応は怪しい。この母字は玄衣音義に見える(餘照反 餘灼反 弋灼反)。しかし、註文は少々ずれる。故に、この反切用字からしても、これはDであらう。陰類と陽類とが相通するとは絶對ではない。しかし、中古中国音では稀なもので、この現象は出来るだけ同類同士で解決するのが自然である。斯くて、⑭の反切を眺め直すと、玄韻では「弋照切」であるが、これを眺ると、「王一・王二・王三・唐韻」で、「弋笑反」となつてゐることに注目される。龍龕手鑑でも「弋笑反」である。さすれば、右は、或いはこの誤字であるかも知れない可能性が浮んでくるのである。既に、その上字が誤られていた。下字も、笑↓羊 ではないからうか。

⑮ はこの誤字説を採りたい。唯、多少とも氣掛りなのは、この字、我が名義抄に、「曜 羊照反」として引かれ、また、別れ、

燒燿 下古ハ曜 スハル 羊昌

とある矢である。この「羊照反」なる反切の出所は未だ知らない。それれ、これは恐らく反切ではなからうが、最後の「羊昌」は不明である。これが反切ならは、「冒」は陽韻なる故に、⑭は再考を要するからである。

⑯ 恁 (並音開2) 方口・方救ニ反

これはこの儘では、余りにも音が離れ過ぎる。実はこの母字は、「恁」なりである。それは、例えは、集韻に依つて確かめられる。集韻では次の如くに示す。

恁 (また) 俯九切 音云 同恁

恁 或作恁

因つて、⑯は改めて書き直すと、

恁・恁 (非音開3) 方口・方救ニ反 (寧)

となる。この二番目の反切下字は、去声宵韻であるが、四声こそ違ふ、母字と同韻であるので、直接の問題とは今、しないでおく。とすると、これは、尤韻・侯韻という流れ内、相通は變じて、問題外になつてしまふものな

のであつた。しかし、Dであることは動かない。序で、この主な反切を出してみる。

方久切：玄韻、切三、王一、王三、慧琳

方婦反：玄衣、名義抄

甫久反：玉篇

方久反：龍龜字鑑（また、芳武反とも）

⑭旁（滂唐開一） ○包、普岡二反（音）

右の第一反切が疑問である。上字は一寸不明。下字の有韻は陰類で、母字の陽類と大きく異なる。若し、誤字でないとするれば、これは或いは和風への如くに感ぜられもする。その証拠は、前篇の「直音注」で指摘しておいた事柄である。しかし、出所は未詳であるにしても、右は、直ぐ統いて、正しき第二反切がある。故にその単純に、これをどう儘に肯定するとは出来難いのである。今はこれ以上に進展の道はなく、存疑とする以外にはない例としてこれを止まる。

⑮臆（匣度合エ） 王豆、古王二反

右は、どう儘では、子母候韻・見母陽韻となつてしまふが、それはどうも怪しい。そこで、反切を検討するに、この母字に属する小韻の代表字に、「王一、王三」では、

横 胡音反 又 古皇反

とある。「臆」自体には、この又音の方はないけれども、何か⑭と関係はないであらうかと思われてくる。その縁で行くと、右の第一反切「王豆反」なる陰類の方は、或いは「皇」等の誤認ではないか。その反切用字の二字は不明だが、少なくとも下字は、それらしく疑える。本書では、まゝ反切用字の一字を落とすこともある。それで、これも、何か上字があつて、それが続く下字「皇」を、いわば、分字しただけの結果になつたのではないか。第二反切の方も疑えば疑われる。が、取り敢えずは、この儘にしておくとする。結局、この二つの反切は、唐の陽韻を示すはずとなる。斯くては母字の度韻と相近付くのである。そして、斯かる相通ならば、既に、⑭⑮の字、校標のとらで見を通うべきである。⑯は、このように誤字を考へて、切り抜けようとする。

⑯命（微映開子） 莫例反 去（豪）

これについては、余り所見がない。反切を豪韻（平声）で示し、四声は去声である。「旁」字の問題があつたが、簡単な代りを出すことが出来ない。因つて、誤

字の、存疑、としておくれ留める。唯、尔雅音義にけ次の如き例があることを、参考まで付す。

蛸(来豪開) カ刀反 字林同 又カ公反(東)

これは、広く、陰、陽類の相通例として参看出来よう。

⑭ 朋(並登開)

父弘反 平
不列反 上(陽)
奉登反 去

この声母については云われないとして、右三つの反切の中、最中のものが不審である。この反切下字「芳」は陽韻(平声)である。それを「上声」とする。唯、唇音は開合に關しては広韻でも嚴密でないことは忘れていない。

これども、斯く、聲母字を字撰字で注音するのは普通ではない。これまた、疑問の儘に残しておく。

以上は、⑮を除いて、何れも合矣の行き難いものばかりである。いわば、疑問形と一括出来そうである。奥には、何かミスと想定したいのである。

このミスに繋いで、なお疑わしいもの、或いは誤字等の明らかなものをめぐって、次に四つの場合を検討する。

その一つ、

⑯ 健(群類開)

居勤反 又 渠建反 去
この第一反切は、見母欣韻である。母字と切り離して、

この反切用字のみを見れば、これは広韻にある反切である。即ち、「斤 居歟切 又 居勤切」と見える。尤韻と欣韻とは隣同士である。それ故、或いは紛れ込んでものかもしれない。

第二反切は、広韻(王一、王三、唐韻)のものであり、まは、玉篇、玄文も同一なので、問題は無い。

今、尤韻と欣韻とは隣同士であると述べたが、この両者では、新撰字鏡で、次々如きことがある。即ち、Aの箇所、

僞(影類開) 於勤反 依人(焮)

とある。この母字は、広韻で元(願)韻となるが、「王一、王二、王三」では、右の反切通うの欣(焮)韻なのである。そして、玄韻では、別れ。

僞 於勤切 依人(焮)

が加わる。「王三」の「人」字は無い。この場合は、字形類似ということ、諧声系列ということもある特殊例なので、直ちにこれを敷衍化しようとするのではない。唯、斯かる近似性が、既述の⑭の場合と同様に、この得ぬものではないことを理解したいのである。

その云々は、例之は、我が法華經叙文に、「大目犍連

「捷」に就いて、

捷(群仙開) 渠悉反 順標云居隱反

という、この「順標」音が思い出される。これは当面の音形と甚だ近い。「居隱反」は見母欣(隱)韻となるからである。そして、これが広韻音と対する。

斯くすれば、始めに感じたが如く、これは紛れもないものでござるやうである。どうか、現実のこの音が行われていたと見なければならぬやう。

なお、右に「僣」で引いた反切が、その一証ともなるのであるが、新撰字鏡のAは、当然、「広韻」その儘ではない。卷一の場合、大約三割強の反切用字が、切韻系韻書でないこと求められたいのである。そして、管見ではそれらは「王三」(「王一」)に一致することが最も多い。殆んど「王三」的と云つてもよい。このことは付言しておく(この矢に關して詳しくは後日を期す)。

さて、右の②0に關連するものとして、

②1 吞(透先開) 土天・土訓ニ反(元)

がある。やはり、山攝元韻が中に入り立って、それと臻攝との相通問題なうである。その一般的趨勢は最早、言及する必要がない。従つて、これは提示だけで終つてしま

いのである。

しかし、一言だけ付け加ふるならば、この第二反切のようなところには、知風の反切が一瞬、腦裏をかすめ勝ちである。それは、この前の②0とても同じことだが、我々としては、所謂吳音のことが常に胸中に存するので、これを優先させてしまえば、事は簡単になるからである。本稿ではそれは極力押えなければならぬのは、云うまでもない。

②は前者②0に付随させておき、次は、

②2 馨(林侵開) 士今・士訓ニ反(蒙)

に移る。この第二反切は何としても誤字である。即ち、母字は唇内音(き)であるから、これは唇内音(き)であるからである。斯かる相通は存しない。彼エでは當然であるが、我が國でも嚴に区別されたことは定説となつてゐる。現に新撰字鏡巻一でも、これは見えない(一つ問題になるから如くであるが、それは單純なミスである。このことはこの直後、②で云う)。

この母字は普通、平声の一音しかない。そこのらすると、この誤字された字も、平声優韻字の如く思われる。但し、これはDのうであるので、或いは、上、去声の

場合もなかつたとは断言出来ない。その外、不安であるが、唇内韻尾は動かないと云ふ。次に、参考として、く
の字の反切を若干記して置く。

- 鋤針切(玄韻) 鋤簪反(王二) 鋤金反(王三)
- 仕林反(玉篇) 士吟反(龍龜手鑑) 音岑(名義抄)

さて、くゝの最後は、次のものである。

㉓ 傷(精釋合々) 又作俊 才兼・千人・姉峻三反
この字はまた、

俊 子迅反

としても重出する。そして、くの方も同じくDに属する。

ところで、㉓の「三反」は誤りである。結論的には、

第三反切「姉峻反」のみであつて、上二反切は実は注

文である。それは、第一反切の下字「兼」は如何にも珍

かしい。母字は唇内音であるのれ、これは添韻で、唇内

音になる。くゝとは、今、㉓で見れば如く、あり得ない

からである。従つて、くゝは、

才兼千人

と読まねばならない。新撰字鏡では、まず反切があつて、
その下に注文が来るのが一般形式であるが、㉓はその例

外となつて、反切が最後に示される。明らか誤認か誤
写であらう。

反切用字としては、「姉峻反」並びに、後の方の「子
迅反」は、目下、他に所見がない。しかし、玄韻的音形
には正しく適つてゐる。因つて、先の注文を指摘しさえ
すれば、それで一旦終つて、音の上での問題はなかりで
ある。

唯、Dを見極めろる上下、その注文に目を留めると、意
味的には同じくとは漏しても、くゝの㉓の通うの書き方
は、容易に見当らぬ。例えは、次の如くは、少々ずれ
てゐるのが管見のとらである。

王二：子峻反 才通千人

玄韻：子峻切 智通千人

玄応：子閏反 王逸注楚辞云、千人才急俊

資閏反 淮南子云、智出万人曰英 千人曰俊

名義抄：音駿 智出万人

それが、新撰字鏡巻第十一の、やはりDに属する「X

字の説明には、正しく同文が出る。即ち、

X 才兼百人曰X 才兼千人曰俊 才兼万人曰

傑

とすると、「俊」字と「夂」字とは、恐らく出典が共通するものであろうと思われ、そゝには、㊦の反切が用いられていないに違いない。後の「夂」には二反切がみつて、一は玉篇と一致するが、他は未詳のものが記されている。このことも一証となり得ようが、その種本は独特の反切音を有していられてゐる。この註文は斯かる意味で、価値が高い。そして、新撰字鏡全巻に亘れば、まだ似た類の事柄は集められるであらうと期待される。

なおその序で云うが、この「俊」系列の語「英、俊、豪、傑」の内容規定は、書に依つて小異が認められる。康熙字典に依れば、淮南子・泰族訓を引いて、右の順に、万人・千人・百人・十人に考れたいものとす。しかし、右に出した名義抄の如きともあり、また、新撰字鏡では、

傑 才選於万人曰傑

等とも見ゆる。玄応、慧琳では、

傑 智過千人曰傑

とも云う（名義抄では「十人」とする）。どうやらこれらの出所はやはり淮南子にありようであるが、それがどう継承されているかは今は問われないとする。が、新

撰字鏡では、多分、所拠は複数であらう。そのDの中で、同一書であることの認定の可能性は問われているのである。こゝではそれを示唆し得たことと満足しておく。

五

王力（中国語言学史）に依れば、「反切之学」は、齊・梁間（南北朝）即ち盛行していら、そして、その反切用字はかなり多彩であつたはずである。が、現存資料で、その異同を示しているものは、次の三つの親吳から整理される。王力の語を借りれば、それは即ち、

- (イ) 古今的不同
- (ロ) 方言的不同
- (ハ) 師承的不同

である。今までの取上げて来た新撰字鏡巻一の異撰に相亘るものも、誤字の場合を除いては、この三者の中の何れかの顕現ではなからうか。若し、積極的に知製の証拠が出せやうならば、そう考へざるを得ないのである。そして、事実、その線を濃厚に本稿では押し出して来たようである。

こゝで、一つ、今までのものと異つて、判然と、右

の(ハ)に属する例があることを指摘することにする。それは、

(24) 標 (幫聲開二) カ酌反 略治 亦強取也

である。これは、疑いもなく、(ハ)である。広韻(「王三」に「ハ」の母字はない)、玉篇では、来母の音がない。ところが、玄交には、右の通りにあるのである。玄交では、「髻標」なる熟語で見えるものを、新撰字鏡では単字に分解して、それ(ハ)別の箇所に出す。今一方の「髻」は卷三に属するが、これも全く玄交の儘である。

「標」は、諧声系列からすれば、来母薬韻の形も想定出来る。他は、例えば、「標」字は広韻で、来薬開の音を持っている。が、(ハ)は、推定に依る必要がなく、注文をも含めて、玄交をそっくり承けている。つまり、(ハ)の適例とはなるのである。

なお、我が名義抄では、(ハ)の玄交と共に、まだ一つ何かを承けているようである。そ(ハ)の註記は玄交の通りであるが、反切は、

カ酌反 釘灼反

と二つなのである。(ハ)の後者の出所は遠かには明かし難い。唯、龍籠手鑑には、「書若反」とある。(ハ)これらと関

連付けて、解釈は可能であるが、その師承的關係は必ずしも定かではないのである。

本稿の対象たる新撰字鏡巻第一の中、今、問題のもの、斯く来源が判然とするのは、(ハ)一例に尽きる。(ハ)は従って、事情が明らかであるので、問題外に置いてよいものとなる。

以上、二十四例に就いて、縷説して来たが、大きくこれを纏めると、次の如くなる。即ち、本稿で云う異根相通は、四つの場合がある。

- 一、古形
- 二、疑問形
- 三、誤写
- 四、師承的相違

そして、以上は、大体(ハ)の觀吳で括弧つづ述べて来たのであつた。その中、音形としては、(15)(23)(24)は明らか以外に得られ、また誤写を含む疑問形若干は、未知如何ともし難いので、結局、二十例前後が問題として残ると云わざるを得ない訳なのである。

(ハ)には、王カ(ハ)云う(ハ)に依る不同が混在しているものと思われ、その区別は明らかにはならない。

従って、仮令、これらを全て、広韻的音形より古形
という風に一括するとすれば、それの傍証となり得るも
のが他に一二ある。それを出して見て、今少く検討を
加える。

ここで、最も顕著な徴証は、去声と入声兩読字である。
即ち、上古中国語と中古中国語との最大の特徴は、前者
では「入声有兩類（其中一類到後代變了去声）」、後者
では「去声字的產生」（王力『漢語史稿』）とされるよう
に、この兩者間の關係は重要な *key-point* となる。それ
を、今、適用する。やうすると、次の如きが認められる。

㊸ 会（見泰合） 正胡外反 去 借古外反 去

又 胡格反 入

右の中り入声の場合は、広韻、玉篇、玄玄等では既に
姿を消している。が、集韻には、去声と共に、また、「
古治切」胡格切」が登載されているのである。他には、
經典釈文中に、例えば、ヤウ荘子音義で、

会 古外反 徐（鑑）古治反 向（秀）音治

等とある。

考えてみれば、この諧声系列は、広韻でも去声入声兩
読として残っている。唯、個別の字に於いては、大体、

去声の方が固定することが多く、入声であるものは少な
い。ましてや一字兩読の場合は稀である。が、それに至
るまでには、兩読のものも多かつたのであり、次第に、
その入声の方が消滅したということも明白である。「頗
能保存古音」（王力）とされる經典釈文に、従って、い
わばその過程中の形がかなり表われろのは、自然の理な
のである。

このことはまた、音論、南北朝詩人の押韻でも確認さ
れる。大勢としては、当面の秦、晉末韻は、その第一期
は通用される時期であり、第二期よりは独用となつて行
くらしい。ヤウほんの一端を示せば、

外末 太 泰 会 寔 大 （張融・海賦の一部）

の如くである。

このような背景の下に持つて来れば、右の㊸は十分に
納得がいく。蓋し、本稿で云う古形の通例であらう。

同様のものとして、

㊹ 燿 五代・丑伐二反

がある。この字、広韻には無い。意味は異るが、「燿」
は徹犬聞エの音である。実は右はBの箇所を辨っている
ものなのだが、玉篇では、この字二反切のみであつて、

上の第一反切はをいのである。註記は同じである(と云うのは、新撰字鏡では「炆烟是」とあるが、玉篇では「煙起」である。そしてその隣に「炆 燭 燒」がある。新撰字鏡のは、玉篇の訂正とみればよいと思われる)。そこで、この第一反切は疑われる。他書では、

丑伐・斬列・他達切(集韻)

貸・闌二音(龍籍手鑑)

貸・檀二音(名義抄)

等と見えらるといふようにして、これは、「丑伐反」の誤字である。さすれば、この音形は理解される。唯、この反切の出所は未詳である。或いは、原本玉篇に於いたものだろうか。

が、それは一往不問に付すとして、この(25)の例は、斯く去声、入声兩読のものなのである。そして、これを前者(25)の傍証とする。

今一つ、くくで不審なものがある。それは、
(26)位(于至合) ○ 夂・〇 羅二反 去

である。この反切上字は二つとも、一寸不明だが、第一反切の下字は、入声質韻になっている。普通には、(26)字の入声音は知らない。が、例えば、前にも引いた文選音

決は、

位 于筆反

とある。同書では、他は、「器 去乙反」等も見えらる。

だが、仮令、これを証としなくとも、一般に、止攝と入声とは関係付けられるものである。広韻にも、例えば、「比」(奉至開4-奉寘開4)等が残っている。それ故、

(26)はこの儘でも解せられよう。但し、第二反切の下字は上声である(これが旨韻ではなく、紙韻であることは問題なし)と見えなくともよい。止攝四韻は、BでもCでも混同している(この四韻も問題となるけれども)。

が、他面、また、誤字かという目でも右は見られるとくわがある。それと云うのも、本書の卷三、Bの箇所は、
姿(精脂開4) 于世反

とあるが、玉篇では、「子私反」であるが如き例が存在するからである。この「姿」は平声である。しかも、註記は一致しているから、くくは、恐らく、玉篇通りである。とすると、この「夂」は誤字となる。そして、これが、(26)の第一反切に援用されはしないだろうかと思われ、てくるのである。この際、母字の合口と、反切下字の開

口とは氣にする必要がない。既に、今の場合、「王一、王二、王三」の下字は開口である（滯莫反）からである。斯く、②は二様にも解されるものである。が、何れにしても、広韻よりは古移である筈だけは動かない。

以上が、去声入声間相通の親兵より見た、多分、彼エ流であろうところの具体例である。こういうものを含む新撰字鏡のDが、従って、かぎり古態を示すのは、寧ろ当然のことであろう。

そこで、若し、既述のものを全て肯定して概言するとすれば、本書のDは、我が国現存文献では、最も古い反切を纏って有しているものと云えるのである。恐らく、中国南北朝のものを相当引き継いでいると云っても誤りとはならぬであろう。

ところで、新撰字鏡編纂時以前の資料では、現存しているものがある。そして、それらの中では、大抵、目下未詳の反切が含まれている。本稿流に云えば、A、B、C、で以て確認されたないものが幾許か存するものが常である。それらはつまり、Dとして残るものである。くのD同士では、お互いに合致するものもあられ、そうでないものも他面多いとは、前述したか如くである。その引き

合わせは、一々、今、している余裕はない。が、その何れであつても、問題は、それが果して、彼土製か否かの一矢に絞られる。

抑々、中国本土においても、その上古、中古間―本稿で云う初期中古中国音―の研究は十分に大成されていない。経典釈文ですらも、未だ十全ではないようである。近時、次第にその辺の解明に力が注がれているという実情である。たゞ、その研究、成果を簡単にくらべて採り入れるという訳にはいかない。我が国では、まして、仮名書音形以前の字音の姿は、未開拓の分野に属している。斯かる時矢では、本書Dの如きは、甚だ魅力的ではあるものの、また一面、どうもすつきりとはいかないことも多い。本稿ではそれを、少なくとも韻母の面では、古移として把握しようとし、また、大体、し得たと思つてある。

しかし、字音は、声母、韻母の合した全体一つの音として眺めなければならぬ。その矢、本稿では不十分であることは無論である。従って、くくでは斯く見当をつけてみたというに止まらう。が、これを基矢として、一音の全音形を見定めの上で、始めて、その反切の細的か

否かに答え得るものである。本稿はその準備に過ぎずといふとは、最初に断つたが如くである。

我が国で、反切の研究が急速に展開されるのは、悉曇学の影響に依る。そして、その、平安朝期における最高峰は、安然である（小西甚一「文鏡秘府論考」）。新撰字鏡の成書は、恰かしくその安然（二二〇〇年）の晩年に相当する。本書の編者昌住は、その序文に依れば、さして恵まれぬ環境にあつた篤学の士であるらしい。果して、悉曇学乃至反切字に通じていたかどうかは不明であるが、その態度としては、必ずしも音韻学者ではなかつたかの如く感ぜられる。しかし、このように諸書に採しておれば、自ら、反切の何なるかを理解することも可能であつたであらう。時勢的にも、個人的にも、新撰字鏡はそういう事情の中にあることも、思つてみなければなるまい。

六

以上、新撰字鏡巻第一のDの中、今回は特に異撰に相対するもの検討を行った。ここで纏めて云えることは、誤字等の場合を除いては、まずそれらは古形を留めるといふことである。少なくとも、中国語音史の側から見れば、

は、そのならざるを得ないものである。しかしながら、他面、我が国の方よりすれば、それは一体如何なるであらうか。答は未だ保留する。それは、一つには、新撰字鏡の分析が、今始まつたばかりであるということにも依る。今一つ重要なことは、我が国の反切法の歴史が、これまでこれからの究明を待つというものであるからである。この兩者、奥では深く繋つている。そして、相互依存の関係にある。

我が国の反切と云えば、その和製なることの判然としていられるは、一時代下つての院政期のものである。恐らく、一代の碩学、天台僧明寛一派では、その相承があつたのであらう。しかし、その始源は必ずしも明らかではない。

所謂訓長資料には、反切注も散見する。が、それでは和製のものを引用することは無いかに見える。普通は、彼土のものに依つていゝ。就中、玉篇を引くことが多々あつてゐる。が、一方、別れ、形態を異にし、しかも、本文が我が国人の手になる重要記訓紙等では、或いは独自に反切を作ることもあつたかも知れない。現存の興福寺本には、極めて僅かながらも、その疑わしきものが記さ

れている。新撰字鏡にはその反切自体は採り入れられていないけれども、編者昌住は、この書のことは知っていたはずである。訓釈中の反切が付せられたのは何時か、それは今措く。が、南都の僧間では、ひやう字音の和化がめつたとは想定されるであろうである。

やういう気運にも采つて、卷疊字者が和製の反切を用いてめらう。新撰字鏡は時期的に、その黎明期に成つたことは、前にも述べた如くである。

斯く、あれやこれやを考える時、益々、新撰字鏡Dの考察の重要性とむつかしさが思い知られる。従つて、その所拠未詳の反切は、十分の考証を必要とするのである。単純に、その和製を公認出来ないので、当然の事柄に属する。

本稿は、その一端を展開したに留る。なお統稿を俟つて、くくで提出した課題の解決に向いたく思う。

へ註

① くく云う「諸問題」は、文字通うの「諸問題」であるが、就中、次の如き事柄には強く惹き付けら

れている。「国語」はいつてきた漢字音の研究も、その反切によつて系統と変化とを考ふるべきであるが、まだあまり研究は進んでいない」(国語字辞典・馬淵和夫執筆)

② 貞川氏の「解剖」(本誌15輯)の総字数一覽は、異体もそれぐ一字と算しているし、重出も別に一項としていろいろで、くく云う字数よりは、当然多くなつている。因みに、それを引けば、卷一は、176と151字である。本稿では、176字。

③ 「膺」にはまた一音として、来戈合一(落戈切)がある(龍籠手鑑にも、古陸反、また音蝶)。これを取るとすると、本書の「花和反」は、この上字を「落」と置換し、えすれば、それでよいことになる。この方の可能性の方が強いかも知れない。

④ 名義抄(親智院本)には、別々な所、次の如き例もある。

澆(群養開) 巨冢・巨函二反(度)
御(群養開) 巨逆反(隔)

⑤ 若し、この第一反切「王豆反」を認めるとすれば、陽類一陰類対応の外に、この候韻字から、我が国字

へ付説

(一) 他書に於ける出典未詳の音と、新撰字鏡との比較

集韻	格	と	同
尔祖音義	古祖反	戸嫁反	音類(匣母)
名義抄	音格		

假(見攝開之) 正古祖反 上 借古(詳)反 去
又胡篤反 何韻反 入

多し、また、入声、去声兩読のものもある。この多し、今頭を離れてはいない。

な所、一つ、次の如き例をここに付加する。

音の仮名書音形に影響が生じてくるはずなのである。候韻は問題のある韻であるが、これを「ロウ」と置換するのならば、母字並び第二反切の「ロウ」と韻替する。逆に、「ロウ」であれば、多くは片付くが、そのためにはおお種々と固めていかねばならぬ問題が残る。その意味ではこれは、興味深き反切であると共に、また難しき反切でもあるのである。

⑥ この反切下字「必」は、左韻では入声質韻であるが、これを音符とするものには、去声至韻となるものが多い。また、入声、去声兩読のものもある。この多し、今頭を離れてはいない。

は、何時かは行われなければならぬ。本稿では、自藤氏に依る一連のものと、大乗理趣六波羅蜜經文中の「書中」とを主に視野に留めた。この後者に関しては、上田正氏の解説(並べ、昭和四十四年秋国語学会発表)がある。新撰字鏡と浅からざる関係にありやうだが、また一面、この書独自のものもある。その見本を若干示す。

候(林止開之) 條史反(定母) 但し徐(諫字か)

靈(照遇合之) 勅有反(徹母有韻)

蛆(精魚開之) 処余反(穿母)

鎖(心果合之) 出生反(穿母)

陟(知識開之) 直割反(澄母德韻)

名義抄中にも、類似のことがあつた。まず、圖書寮本の整理から出発して、観智院本に至ること等が残されていよう。

(二) 心空の法華經音義に、「弘法大師御自筆經云」として、幾つかの反切音を付している。その中にも、やはり出所未詳のものがある。この中の背景も流し必要があるだろう。その一例

混(微真開之) 每忍反 每二反

この第二反切はまた、「異音字」の中にその儘、納ま

うくんでいる。

(三) くくで、前稿の終りの方で言及した反切について、若干、補つておきたいことを記す。以下、前稿の頁数(ダフシユは下段)を上付す。

29 蠶(澄東開) 除有反 平 徒隆反 平

くの反切下字「有」は一才怪しい。玉篇「除中反」、玄応「除中、治中、直中反」である。右は四声「平」としては、「有」は上声である。誤字か。

29 梵(奉東開) 扶風・扶流ニ反

くくは、玉篇に「扶流反」とあるに依り、尤類はくの儘に認められるが、集韻にも、又音として「房、尤切」がある。

29 鏡(見蒸開) 正冀隆反 平 借渠陵反 平

右の反切下字は、或いは「澄」(蒸)か。「冀澄反」ならば、玉篇に「鏡」、特に、本書Dの「正音・借音」対比のありものは、その「正音」が玉篇に一致するところが多いのである。註文は必ずしもそのやうではないが、反切は玉篇系の可能性が最も強い。その目で見ると、誤字の疑いも生ずる一例で、これはある。

29 涼(来陽開) 正力〇反 去 借カ将・カ命ニ

反

くくは、「カ牆反」であった。そして、くれば、右に述べた「正音」―玉篇音となるものである。

29 柔(日尤開) 所充反

くの例は、新撰字鏡ではなく、新訳華嚴經音義私記のものであるが、そくには誤記があるようである。即ち、本文の、

柔更 上所充反 二合 弱也(以下略)

が疑問なのであって、くの反切は、下字の「更」のものと解すべきである。すなわち、

更(日猶合) 所充反

となって、問題はなくなってしまう。くの反切下字は、「充」ではなくして、「充」であった。右は、井野口孝氏の指摘(文学史研究15)に負う。